

M・ブーバーとハシデイズム

早乙女 禮 子

一、はじめに

マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) は一九世紀の後半、ウィーンの裕福な家庭に生まれたが、彼が三歳のとき、両親 (父 Karl Buber、母 Elise) の離婚の結果、オーストリアの「皇帝直轄領」ガリチアの当時の首都レンベルク (Lemberg) の父方の祖父ザロモン・ブーバー (Salomon Buber) と祖母アデーレ (Adele) のもとに引き取られ、人生の最初から波瀾に満ちた歩みを余儀なくされたのである、と同時に彼は幼児の時以来、彼の生涯を示唆する大きな鍵ともいべき三つの「出会い」を体験したのである。

まず第一に、両親の離婚により、父方の祖父母のもとで一四歳まで育てられたが、彼の四歳の時のバルコニーの体験¹⁾、それから二〇年経って母と再会した。かの体験を少年の頃から「すれ違い」(Vergegnung) という言葉で造語し、それを (人間と人間との真実の出会いの失敗) として捉え、逆に「真の出会い」(echte Begegnung) (人間と神との出会い) を求める出発点となった。²⁾ 第二に、幼少年時代彼を引き取って養育してくれた、ユダヤ啓蒙運動のハスカラの指導者であり、と同時にミドラーシユ文献学者である祖父からは「言語への愛」を、とくに家庭では外国語の個

人教育をしてくれた祖母からは敬虔なる「真実の言葉への愛」を教えられた。³⁾ また、第二に、父からは九歳頃から、毎夏ブコヴィナの父の農場で過ごした際に、自然や農村の人々と素朴な出会いを体験した。また、その間、時折父に連れて行かれたサダゴーラ (Sadgora) やチョルトコフ (Cortkov) のハシディストの集会で見、かつ体験したことが生涯ブーバーの心を捉えることになったのである。⁴⁾

これら三つの出会いはブーバーの生涯における思想形成に重要な鍵をもっていると考えられる。つまりそれは彼の文化的シオニズムを通してのユダヤ民族的自覚、対話的実存 (Ich und Du) の哲学的人間学ならびに、宗教的社会主義による共同社会 (キブツ) の構想やヘブル語聖書の F・ローゼンツヴァイク (F. Rosenzweig) との共同によるドイツ語訳の翻訳等に見ることができるよう思われる。

さて、このことはとりわけ M・ブーバーの『わたしのハシディズムへの道』(Mein Weg zum Chassidismus, W. III, 953-973, 1918)、『ハシディズムの教えによる人間の道』(Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, W. III, 713-738, 1948) 等を手がかりとして、M・ブーバーの生涯を方向づけることになった、彼の「ハシディズム」における出会いと「神に至る人間の道」における彼の言説に見られる彼のハシディズム像に照明を当てて見たいと思う。

二、M・ブーバーにおける「ハシディズム」への道

——『わたしのハシディズムへの道』を中心として——

(Mein Weg zum Chassidismus, W. III, 959-973, 1918)

一般に「ハシディズム」とは、語源的には「敬虔なるもの」を意味するヘブル語の Hasid (Hasidim, p.) に由来し、敬虔というユダヤ教の本質を現わす「ハシドゥート」(Chasidut) から派生したものである。もともとユダヤ宗教史上に現われたさまざまな敬虔主義の運動を指している。すなわち第一マカベア書二・29以下で「教えにあくまで忠実な、教えのために闘う群れと報告しているあの人々、そしてミシュナ (Mishna Ⅱ 反復) が「わたしのものはあなたのもの、またあなたのはわたしのもの」と言う者は、それゆえ、自分に所有権ありと主張しないものはハシド (Hasid) である」と述べているあの人々に始まる」(W. III. 961. 1918)⁵⁾とブーバーは定義づけている。

さて、ここで取りあげようとしている「ハシディズム」とは、一八世紀の初め、バール・シエム・トヴⅡベシト (Baal Shem Tov=Besht Ⅱよい名の主) と呼ばれた、イスラエル・ベン・エリエゼル (Israel ben Eliezer, 1700-1760) によってポーランドの片田舎に始められた、神秘主義的色彩を濃厚にもつ、ユダヤ教内部の大衆的な信仰運動をいう。先にも触れたように、ブーバーと「ハシディズム」との出会い、彼が九歳頃から、毎夏父の農場で過ごした際に、時折父に連れて行かれたサダゴラやチョルトコフの集会で、とりわけサダゴラの「ハシディーム」の人々と交わりをもった時に、強い印象を受けたといわれる。つまりそこには最早初期の時代の強烈な信仰は生きていなかったが、彼は子供心にもラビが、待ちこがれる人々の列を分けて進むのを見た時、「指導者」を感じ、また「ハシディズム」がトラー (Torah) の巻物をもつて踊るのを見た時、「交わりの教団」を感じたという⁶⁾。そして「共通の畏敬と共通の魂の欲びとは、真の人間の交わりの基礎である」ことを予感したのである。このことがブーバーが生涯「ハシディズム」に関わる決定的出会いとなったと考えられる。

ところで、青年時代のブーバーは、当時のユダヤ系青年と同様、理性的目覚めと共に西欧文化の魅力の虜となり、

その吸収に向けられた。しかしユダヤ人の民族性と結合しない知的探求の中で、それによって満たされない彼の精神は、拠り所なき「混沌の世界」(Olam ha-Ron)をさ迷わざるを得なかったといふ。⁸⁾

その時代に、ブーバーが出会ったもう一つの重要な出来事は、一八九六年ユダヤ系オーストリア人、T・ヘルツルの唱えたユダヤ人の独立国家を祖国パレスチナに再建しようとする、「シオニズム」運動である。この運動によって、彼は、ユダヤ民族とその運命に開眼せしめられ、その伝統的精神の中に生の根拠を見いだす機会が与えられた。そしてその後、彼は積極的にこの運動に参加することになったのである。⁹⁾

しかし、ブーバーにとって「シオニズム」運動に参加したことは、ユダヤ精神が何であるかを知ることなしにそれを告白したに過ぎなかった。¹⁰⁾つまりまもなくアハド・ハーム、ブーバーの標榜する文化的シオニズムとヘルツル一派のユダヤ人の特性(伝統)と創造性を軽視した政治的シオニズムとの間に齟齬があることに気づき、ついに彼と訣別せざるを得なくなった。¹¹⁾そしてこのことによつてはじめてブーバーは、ユダヤ精神が何であるか、さらにその本質を真に知ることへと導かれたのであった。このような経緯を経て、彼は少年の頃サダゴーラで見、出会い、かつ予感した「ハシディズム」に再び帰ることになったのである。彼は少年の頃、ミドラーシユ(研究)学者である、祖父から学んだヘブル語を青年期(二六歳)になつて、あらためて習得し直した。そしてある日、ベシトの『遺言』である、【ツェヴァート・リベシユ】(Zewath Ribesch)という一小冊子をひもとき、その時、次の言葉が彼の心に稲妻のようにひらめいたのである。すなわち、

「彼は熱心という特性をよくよく掴むがよい。彼は熱心において彼の眠りから起きるがよい。何故なら、彼は聖化され、別人となつたのである。そして証しをするのにふさわしい。しかも、神が世界を創つたとき、主なる神

に祝福あれ。神聖な主なる神の特性に似せて創られたのであるから。¹²⁾

プーバーの解釈によれば、この「熱心さという特性」(die Eigenschaft des Eifers)は神の属性としての「進んでしようとする覚悟」(Bereitschaft)、「たくましい活動力」(Wirksamächtigkeit)を意味する。これが神の似像に似せて創られた人間にも分け与えられている。人間は朝毎に墮罪以前の、神の像に似せて創られた純粋な似像のまま目覚める、そして彼が分け与えられたものを実現するか否かは、朝毎に永劫の昔のように、彼が祈り、かつ始めることにかつている¹³⁾ということである。

別言すれば、「人間の生はこの世の中で無限なるものへと開かれており、朝毎に新たな召命があるが、彼は祈ることによって、外なる言葉を離れ、意志と熱情の高まりの中で、神によって別の人間に聖化され、証しするのにふさわしくなり、神に仕えるのである。その際重要なことは、このために必要な戒めは苦行的苦痛にあるのではなく、大いなる歓喜の中にあるということ、何故なら歓喜だけが神への奉仕だからである¹⁴⁾」と。ここで初めて人間は神の(内的)現存(Schenna)を体験するのである。

そのときプーバーは突然にこの言葉に圧倒され、「ハシディズム」の魂(精神)に触れ、原ユダヤ的なもの(ユダヤ精神の根源)を明確に掴むことができたのである。換言すれば、このことこそ、「行為として、生成(発展)として、課題として」把握された、人間の「神の似像性」(Gottesähnlichkeit)であった。つまり、この原ユダヤ的なもの(ユダヤ精神の根源)こそ、原人間的なもの、最も人間的な宗教性の内実であった。そして宗教性としての、「敬虔」としての、ハシドゥート(Chasidut)としてのユダヤ教(ユダヤ精神)が彼に開けてきたのである。¹⁵⁾

このようにしてプーバーはシオニズム運動への参加と同時に、T・ヘルツルとの訣別を通して、「ハシディズム」と

の再会をなすことになるのである。

三、「神に至る人間の道」

——『「ハシディズム」の教えによる人間の道」——

(Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, W. III. 713-738. 1948)

M・プーバーは、『「ハシディズム」の教えによる人間の道』という論文の中で、「神に至る人間の道」を次の六つのキーワード、すなわち「自覚」(SELBSTBESINNING)・「独自の道」(DER BESONDERE WEG)・「決心」(ENTSCLOSSENHEIT)・「自分の心の中から始めること」(BEI SICH BEGINNEN)・「自分の心にかかり合わせること」(SICH MIT SICH NICHT BEFASSEN) および「「547」の場所へ」(HIER WO MAN STEHT) とする言葉を用いて、とりわけ「ハシドゥーター」(Chassidut) である「ラビのハピソートによって」叙述している。

(一) 自覚 (SELBSTBESINNING)

M・プーバーのいう、「神に至る人間の道」としての「ハシディズム」における六つのキーワードの中の第一は「自覚」である。アダムの妻エヴァは悪の象徴たるヘビに唆されて、創造主である神に、エデンの園の知恵の木の実だけは食べてはいけないと禁じられていたにもかかわらず、エヴァは神の目を盗んでそれを取り、しかも彼女の夫アダ

にも与え、それを食べてしまった。まもなく、彼らは神に見つかり、「アダムはどこにいるのか。」と声をかけられた。もちろんその行為を悪と理解していたアダムは即座に神の問いに答えることができず、その責任回避のため、「神の顔を避けて」身を隠したが、アダムは究極的には神の目を逃れることはできなかった。神はアダムにそこから抜け出そうとする自由意志を目覚めさせようとしたのである。肝要なことは、アダム（人間）がこの声（問い）に面と向かって立つかどうかということである。

しかしアダムはこの声に面と向かって立ち、自分が陥っていた罟を認識し、身を隠したことを告白する。そしてその告白と同時に人間の道（善への転向）が始まるのである。決定的な自覚は、生（善）における道の始まりである。そして再三再四繰り返されるべき道の始まりであり、神を畏れ、神に仕える道である。これが神のアダムの創造の目的である。これはアダム（人間）に対する問いである、と同時にわれわれ人間に対する問いであり、悪から善への転向（Umkehr）、人間の全存在の方向転換（回心）を示唆しているのである。

(11) 「独自の道」(DER BESONDERE WEG)

次に「ハシディズム」における六つのキーワードの中の第二は「独自の道」である。かつてラビ・ベールが彼の師（預言者IIツァディーク）に「神の仕えるための普遍的な道の教え」を請うたことに対する答えは次のようである。

「人間に、いかなる道を行くべきかを告げることは不可能である。」¹⁷

つまり教えによって、折りによって、断食によって、また食事によって神に仕える道がある。したがって各人はいかなる道を行くべきかは、全力をもって選ぶべきであるということである。すなわち、われわれは各自の流儀にした

がつて教えと行為の光の中に革新をもたらしべきである。つまりわれわれの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブのわざと同じことをするのはなく、各自の性質、能力にしたがつて神に仕えるべきであるということである。換言すれば、あらゆる人間が神への道をもっている。各々の人間が各自の性質、能力から道を押し進みながら、人類そのものが神に達することができるということである。

とりわけ、『伝道の書』の結び(二二・13)には次のように書かれている。

「事の終りに全体が開かれる、すなわち神を恐れよ」そしてこの一つのことすべてであり、全体である。」¹⁹⁾
つまり、人間は彼の全存在と行為をもって、神に仕えることこそ、真の人間の道であるということである。

(三) 「決心」(ENTSCLOSSENHEIT)

次に「ハシディズム」における六つのキーワードの中の第三は「決心」である。

ある弟子(預言者)が安息日から安息日まで断食し、金曜日の午後激しい渇きに襲われ、死を予感した。そのとき一つの泉を見つけ、そこへいって水を飲もうとしたが、あと小一時間の辛抱ができなくては、この一週間をふいにしてしまふと思い、水を飲むことを諦めた、と同時に苦しい試練に耐えたという誇らかな思いが胸をかすめ、もう一度泉のところに行つて飲もうとしたが、彼はすでに渇きが去っているのに気づいた。そのことを師(預言者)に報告したところ、「つぎはぎ細工」だと叱られた。

この真意は、狐疑逡巡という、行為の前進または後退の性格こそ危険である、つまり「つぎはぎ細工」に対するものは、渾然たる仕事であるということ²⁰⁾。換言すれば、わざは心の統一をもって完成すべきである、心は肉体と精神を

内包した完全なる人間（ツァディークII神の火花の導き手）を意味しているのである。

つまり、「すべて君のなし得ることは力をつくしてなせ」（伝道の書九・10）という聖句をベシトは「人はおのれの行為を身体のある部分をもつて行なえ、すなわち肉体と精神を内包した全人間として渾然たるわざ、統一的なわざをもつて行なえ」と教えているのである。

（四）「自分の心の中からはじめること」（BEI SICH BEGINNEN）

次に「ハシディズム」における六つのキーワードの中の第四は「自分の心の中から始めること」である。

かつてラビ・イチヤクは「家政の管理」について、若い頃彼の妻に悩まされ我慢していたが、彼の召使のことを氣遣って師（ラビ・ダヴィド）に相談したところ、「すべては主人であるあなた自身にかかっている」と戒められ、目から鱗が落ちる思いがしたという。

その時彼はベシトの一つの言葉を想起した。すなわち、

「思想と言葉と行為がある。思想は妻に対応し、言葉は子供たちに対応し、行為は召使に対応する。この三つをおのれのうちに整える者には万事が良い方に変るのである。」そのとき、わたしは師の言葉の意味を即座に理解した。つまり、すべてがわたし自身にかかっていることを」。

つまり、自分の心の中から始めること、それだけが問題であるということ、換言すれば、すべてがわたし自身にかかっている、という方向転換の認識と、自己調整という方向転換の意志による以外に、如何なる解決も生起し得ない。要するにプーバーのいう、「われ—それ」の個我的われではなく、「われ—なんじ」の人格的われとして決断（選択）

し、始める（愛す）べきであることを教えているのである。

(五)「自分にかかり合はぬこと」(SICH MIT SICH NICHT BEFASSEN)

次に「ハシディズム」の六つのキーワードの中の第五は「自分にかかり合はぬこと」である。

賢い、敬虔な、慈悲深い花婿の父（ツァディーク）が、相手の花嫁の父（ツァディーク）に向かつて、まだ自分が真の転向（Umkehr）に達していないことを嘆き、自分を責めている。その判断の背後には、彼が自分の罪を過大視し、すでにこれまで行なつた悔い改めをひどく過小評価しているのが隠されているのが感じられる。すなわち、

「君は君のあやまちでもって絶えず自分を苦しめてはならない。むしろ君は、このような自責に費やす精神力を、君がそのために選ばれているこの世での仕事に向けるべきであり、君自身とではなく、世界とかがり合うべきである。」²²⁾

ここでは、自覚、独自の道、決心の宗教的内実とは一転して、他者のため、世界のために働くことを勧めている。換言すれば、ここでは神への転向（Umkehr）ということが示唆されている。すなわち転向は、人間の道についてのユダヤ精神の中心点である。それは人間を内部から新しくして、神の世界における人間の位置を変える力があり、転向者は、往々にして罪を知らない完全なツァディークよりも上位に位置づけられる。そして転向者は高慢や我欲の混乱の中に迷い込み、いつも自分自身を目標にして生きてきた人間が、最後に彼の本質全体の方向転換によって、神への道を見いだすことが可能になるのである。

ブーバーによれば、キリスト教は各々の人間のために彼自身の魂の救いを最高の目標にしたのに対し、ユダヤ教で

は各々の人間の魂は人間のわざによって神の国になるべき神の創造に奉仕する一員（共働者）であること、神の民になるべく、目指すべきことを教えているのである。²³

要約すれば、ユダヤ教では自分自身の救いを目標にすべきではなく、各々の魂は自己を認識し、自己を純粹にし、自己を完成しなければならぬ。それは自分自身のためではなく、自分の地上の幸福のためではなく、自分の天上の幸福のためでもなく、各々が神の世界で完成すべき仕事のためである。すなわち人間は自分を忘れて、世界を思うべきであるということ、つまりそれを自己において始めるのであって、自己に終るのではない、自己を目指すのではなく、自己を把握するということ、これがプーバーのいう「ハシディズム」の根源である。

(十六)「いま立っているこの場所で」(HIER WO MAN STEHT)

次に「ハシディズム」の中の六つのキーワードの中の最後の第六は「いま立っているこの場所で」である。

ある信仰深きユダヤ人が三度も夢の中で、プラハの王城の橋の下に宝を探しに行くように命ぜられ、出かけたが、そこで歩哨として立っている衛兵所の大尉に笑われたという話である。

それに対するラビ・プナムの答えは次のようであった。すなわち、

「世界のただ一つの場所で見いだすことのできないある物がある。それはひとつの大きな宝で、ひとはこれを生活の充実と呼ぶことができる。そしてこの宝が見いだされる場所は、ひとがいま立っている場所である。」²⁴

つまり、「ハシディズム」の教えは、生活の充実と呼び得るものは、われわれがいま立っているこの場所において、神の隠れた生命（神の火花）を輝かせること、これが一番肝要なことであると教えているのである。²⁵

またラビ・ハノクはいう。すなわち、

「地上の諸々の民族も、二つの世界があることを信じている。つまり彼らは二つの世界（聖と俗、善と悪）が互いに明確に対照をなしており、切り離されていると思つてゐる。しかし、イスラエルは、この二つの世界が実は一つであり、すべての現実において一つになるべきことを告白しているのである。」²⁶

ここでブーバーが述べていることは、聖と俗、善と悪とが相互に存在するのではなく、ただ力と方向があるのみである。彼はこれを転向（Umkehr）、つまり悪をなす力をすべて神に向ける心の悔い改めを通して、神と世界との結合、イフド（Yihud）²⁷が実現するということである。

ある時、ラビ・ビンハスはある信者の話に答えていった。すなわち、

「わたしたちは、神を世界に引き入れよう、そうすれば万事がおさまるだろう。」²⁷

またラビ・メンデルは彼の家に来ていた二、三の学識経験者に問うた。すなわち、

「彼らは「何をおっしゃる。世界は神の栄光に満ちてゐるではないか。」と笑つて答えた。」²⁸

ラビ・メンデルの再度の答えは、神は人が彼を入れるところに住み給うと。つまるところ、神を入れるということが問題なのである。しかし人は、自分が現実に立つてゐるところ、自分が現実に生きてゐるところ、眞の生活を生きているところのみ、神を入れることができるということである。言い換えれば、ブーバーの「ハシディズム」の理解は、終末的メシア思想ではなく、現在のメシア思想として捉へてゐること、未来の救いに対する信仰ではなく、現在の救いに対する信仰と捉へてゐることである。

四、結 語

最後に、M・ブーバー(1878-1965)における「ハシディズム」の思惟について、『わたしのハシディズムへの道』(Mein Weg zum Chassidismus, 1918)、「ハシディズムの教えによる人間の道」(Der Weg zum Chassidischen Lehre, 1948)等の論文を中心にして、彼の「ハシディズム」との出会いならびに「ハシディズム」の思惟について、彼の言説に従いながらまとめてきたが、簡単に要約してみたいと思う。

ところで、正直に告白すれば、ユダヤ人の歴史ならびにユダヤ主義の問題を学問的、かつ歴史的に正しく把握することは、到底私の手に負える問題ではない。

概括的に言えば、M・ブーバーの生涯は第一次世界大戦と第二次世界大戦との間にはさまれ、とりわけ「ハスカラ」、「シオニズム」、「ナチスのユダヤ人虐殺」、「イスラエル共和国成立」といった歴史的対象によって特徴づけられる。

まず第一に、M・ブーバーにおける次の三つの出来事も彼の哲学的人間学(Ich und Du)ならびにハシディズムへの道標となっている。(一)、彼の三歳の時、父母の離婚により、真の Begegnung の認識と同時に、彼の造語により、Vergegnung の認識が示唆されたこと、(二)、彼は父方の祖父母に養育されたが、とりわけハスカラの最後の指導者であり、真のミッドラーシユ学者であった祖父からは、ユダヤ精神ならびに学問的影響を、それから祖母からは、敬虔な「真実の言葉への愛」を継承したこと、(三)、また父に時折連れいかれたサダゴラの集会でのハシディズムとの交わりから、「ハシディズム」の核心は、「共通の信仰と共通の霊的欲びとが、真の人間社会の基礎である」(W. III, 95ff.) ことを予感したことである。

またM・プーバーの生きた時代は、ちょうど東ヨーロッパに在住するユダヤ人が「ハスカラ」運動を、同じく東ヨーロッパに在住するユダヤ人が「ハシディズム」運動を、さらに時を同じくして、ユダヤ人の独立国家を父祖の地パレスチナに再建しようとする「シオニズム」運動を展開していたのである。両者の思想的傾向は、すなわち、前者は合理的啓蒙的、後者は感情的神秘主義的と、かなり異なっていたにせよ、ユダヤ人の祖国再建運動を目指していたという点で、目的を一にするものである、つまり、ユダヤ・ルネサンス²⁸として特徴づけられる。

プーバーは、最初は、ユダヤ精神が何であるかの深い認識なしに、T・ヘルツルの創唱するシオニズム運動に参加したが、彼の唱える政治的シオニズム理念との間に、大きな齟齬が存在すること、つまりユダヤ人の特性(伝統)と創造性が欠如しているのに気づき、ついに彼と訣別せざるを得なくなつた。²⁹

第二に、その後プーバー(二六歳)は書齋に戻り、再び「ハシディズム」の研究を始めた、ある日、ベシトの「遺言」(Zewath Ribesch)にユダヤ教(ユダヤ精神)が述べられているのに気づいたのである。

M・プーバーはその中の「熱心さ」(Eifer)という言葉を、神の属性として「進んでしようとする覚悟」(Bereitschaft)と「力強い活動力」(Wirksamächtigkeit)として捉え、その内実³⁰は神の像に似せて創られた人間にも分有されていることを把握した。換言すれば、このことこそ、「行為として、発展(生成)として、課題として」把握された人間の「神の似像性」(Gottesähnlichkeit)であると確信し、このことこそ、ユダヤ精神の根源であり、最も人間的な宗教的内実であると確証したのである。これがM・プーバーにおける「わたしのハシディズムへの道」の要約である。

第三に、M・プーバーにおける「神に至る人間の道」(「ハシディズム」の教えによる人間の道)の六つのキーワー

ドは、(一)、各人は自分を自覚すべきである(自覚)、(二)、自分独自の道を選ぶべきである(独自の道)、(三)、自分の本性を統一すべきである(決心)、(四)、自分の心の中から始めよ(行為 \parallel 愛)、(五)、自分にかかりあわぬこと、(六)、自分が現実^にに生きているこの場で、神を受け入れよ。そこにこそ神は住み給う(祈り)、と確証しているのである。

M・プーバーの思惟を結論づければ、「ハシディズム」はユダヤ教の完成であり、まさに「神に至る完全な人間(ツァディク)への道」として捉えられているのである。言い換えれば、彼の「ハシディズム」は、単なる教えではなく、神を畏れ、神に仕えるという転向(回心 \parallel Umkehr)の自覚をもって、心(肉体と精神)の統一によって、自己責任という方向転換の認識と自己調整という方向転換の意志によって、人間の全存在をかけたの行為(愛)によって始めることを意味する。すなわちこの宗教的内実(神への転向 \parallel 愛)から、人間と人間との人格関係から、共同社会(神の世界)との関係が開かれてくるということ、そして人間の救いは彼が現実に立っているところ、現実に生きているところにおいて、神の愛を実証すること、つまり未来の救いではなく、現在の救いとしてのメシア思想が実現可能となり、完成され、そして人間は神の共働者となる。そしてこれこそ神の恩寵を意味するのである。つまり完全なる人間になること、そしてこれは神の内在的現存、神の住居(シエヒナ \parallel Shehina)にあずかることを意味する。要約すれば、キリスト教では、各個人のために、彼独自の魂の救いを最高の目的としたのに対し、ユダヤ教(ユダヤ精神)では、個人の救いよりも共同社会全体(神の世界)の中での救いの実現を目指していること、これこそ、プーバーが、生涯追究し続けた「ハシディズム」像と言えないであろうか。さらにその実現は神への転向(Umkehr)における愛と祈りによってのみ可能となるであろう。

註

原典資料として次の文献を使わせていただいた。

Martin Buber, Werke III. Schriften Zum Chassidismus, Heidelberg

1964 (1963)

Martin Buber, Begegnung, Autobiographische Fragmente,

Stuttgart 1961 (1960)

また引用の著作の訳等については、主にみずす書房、理想社の翻訳をいく分か変えて使用させていただいた。

- (1) Vgl. M. Buber, Begegnung, die Mutter, Autobiographische Fragmente, S.6. Stuttgart 1961 (1960)
- (2) Vgl. M. Buber, aa.O., ebd.
- (3) Vgl. M. Buber, aa.O., ebd.
- (4) 平石善司『マルチン・ブーバー』——人と思想——、第一、二部、エプーバーとユタヤ精神、一八七頁参照(創文社一九九二)
- (5) Vgl. M. Buber, Mein Weg zum Chassidismus, 1918, W. III. S.961
- (6) Vgl. M. Buber, aa.O., S.964
- (7) Vgl. M. Buber, aa.O., ebd.
- (8) 平石善司『理想』二二四—二五頁、二二頁参照(一九六七)
- (9) 平石善司『マルチン・ブーバー』第一部、I 生涯、二

三頁参照

- (10) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.967
- (11) 平石善司、前掲書、同部、同項参照
斎藤 昭、『ブーバー教育思想の研究』、第二章 思想的背景、第一節、ハシナイヌム、二二六—二二七頁参照(風間書房、一九九三)
「ブーバーにとって、シオニズムはアハド・ホームらの文化的シオニズムに近く、民族運動は未来に通じる時間と存在のいま・ここという現在の実存的各瞬間を偉大な創造的精神の生活感情で満たす人間精神の内面的解放と浄化のため、戦いを目的とするものであった。彼にとってシオニズムは単にユタヤ民族の国民的・文化的再生の手段でもなかりでなく、宗教的再生を意味するものであった。」
- (12) Vgl. M. Buber, aa.O., ebd.
- (13) Vgl. M. Buber, W. III. S.52, W. III. S.967f.
- (14) Vgl. M. Buber, W. III. S.17
斎藤 昭、前掲書、同章、同項、二二九頁参照
- (15) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.968
- (16) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.717
- (17) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.720
- (18) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. ebd.
- (19) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.721
- (20) Vgl. M. Buber, aa.O., W. III. S.724

- (21) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.727
 (22) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.731
 (23) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.732f.
 (24) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.736
 (25) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, ebd.
 (26) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.737f.
 (27) Vgl. M. Buber, a.a.O., ebd.
 (28) Vgl. M. Buber, a.a.O., ebd.
 (29) Vgl. M. Buber, a.a.O., S.738
 (30) 平石善司、前掲書、同部、同項、一三三頁参照
 (31) Vgl. M. Buber, a.a.O., W. III, S.968